

# Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。  
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探すため、  
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。




理不尽な力には屈しない。  
信念を貫き通せる道を自ら拓いた

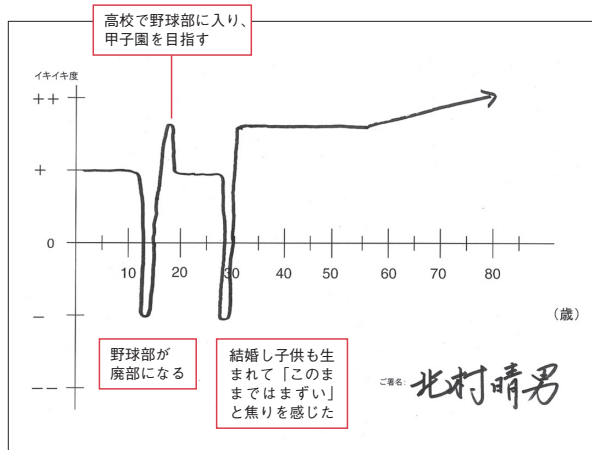
**北村晴男氏** Kitamura Haruo

弁護士

## Career History

### 北村晴男氏の キャリアヒストリー

1956年	0歳	長野県更埴市（現・千曲市）に生まれる。父は鉄工所を設立・経営していた
1970年	14歳	中学校で野球部に入ったものの、2年生のときに廃部に
1971年	15歳	長野県立長野高校に入学。野球部に入り、甲子園を目指して練習に励んだ。3年生の夏には長野大会の準々決勝まで進んだ
		
1975年	19歳	1浪後、早稲田大学法学部に入学。2年生のときに学習塾を開き、大学卒業後は塾経営をしながら、司法試験の勉強を続けた
1984年	28歳	結婚を機に塾経営をやめて司法試験の勉強に専念。翌年に長男が誕生
1986年	30歳	司法試験に合格
1992年	36歳	勤務弁護士として3年間勤務後、東京・赤坂に北村法律事務所（現・弁護士法人北村・加藤・佐野法律事務所）を開設
2002年	46歳	日本テレビ「行列のできる法律相談所」に出演
2011年	55歳	立川支社を開設。経営する法律事務所には、2011年現在、3名のパートナー弁護士と6名の勤務弁護士が所属している。生命保険法、交通事故、破産管財事件など一般民事を専門とし、とくに生命保険に関する訴訟で評価が高い



直筆の人生グラフ。36歳で独立後も紆余曲折はあったが、「努力さえすれば解決できた。フェアな環境での苦労は不幸とはいえません」と北村氏。

法律バラエティ番組「行列のできる法律相談所」でおなじみの北村晴男弁護士。出演は10年目を迎えた。架空の法律相談に対し、4人の弁護士がそれぞれの判断を示して議論するのが、同番組の見せ場の1つ。なかでも北村氏の熱く、真面目な姿は印象的だ。

「『現実の訴訟ではないのだから、そんなにムキにならなくても』と思う方もいるかもしれませんが、でも、法律問題を議論する以上は入り込んでしまう。そうすべきというより、どうしてもそうになってしまうんです」

### 少年時代は、正義感が強く 人とは違う性格に悩んだ

現実の法廷でも、大相撲・元星風の地位確認訴訟など世間の注目を浴びる裁判から、企業法務・離婚・相続などの一般民事までさまざまな法律案件に携わってきた。

「裁判を起こすには、費用面でも精神面でも大きな負担を伴います。クライアントはそのリスクを冒しても自らが受けた理不尽を世に問いたいと弁護士を訪ねる。その勇気に応えたいという気持ちは常に持っています」

個人的にも「理不尽な力には屈しない」という信念があり、それが弁護士として仕事をするうえでの原動力にもなっている。その信念は、中学時代に起きたあるできごとから芽生えた。所属していた野球部が、学校の都合で、納得できる説明もなく廃部に追い込まれたのだ。

「卒業まで校長や教師に抗議し続けましたが、相手にされませんでした。今の僕なら裁判を起こしているところですが、当時はなす術がなく、やり場のない怒りを抱えるだけ。以来、権力を振りかざす人に対して『負けるものか』という思いはすごく強くありました」

だが、同じことを経験しても、学校側に異を唱えない仲間たちもたくさんいた。「自分は変わった人間だ」と意識するようになり、少年時代は密かに悩んだという。

「人の言うことに従えない性格だから、組織に入っても上司と衝突して辞めるに決まっている。このままでは社会で生きていけないんじゃないかと思っていました」

転機は高校2年生のとき。札幌地裁による自衛隊違憲判決に驚き、弁護士を目指しはじめたのだ。

「判決の内容よりも、たった一人の人間の判決が社会を揺るがしたことに驚いたのです。弁護士なら自分の信念を貫けるし、独立もできる。しかも、勉強して資格さえ取ればなれる。家柄も金も関係ない世界です。これしか



ないと思いました」

## 学習塾を経営しながら 司法試験を受け続け、30歳で合格

1浪して早稲田大学法学部に入学。弁護士を目指すことに対し、父はいい顔をしなかった。

「父は家庭の事情で満足に学校へ行けず、裸一貫で鉄工所を興した人。大学に行くよりも、『手に職をつけろ』という考えで、僕もそう言い聞かされて育ちました。父なりに僕のことを思って言ってくれていることは明白でしたが、素直に従うつもりはありませんでした」

当然、大学卒業後に司法試験の勉強を続けるための親からの援助は見込めない。学生のうちに生計の目処を立てようと大学2年生のときに学習塾を開いた。

塾経営のかたわら、司法試験の勉強を続け、合格するまでには7年かかった。旧司法試験合格までの年数としては珍しくないが、当時北村氏は既に結婚し、長男も1歳になっていた。あきらめようと思ったことはないのだろうか。

「信じていたんですよ。いつか必ず合格するって。それに、僕は高校時代に甲子園を目指し、あとひと息というところで敗退するという経験をしていました。旧司法試験は何度でも受けられますから、3年間しかチャンスのない高校野球に比べればたいしたことない。さすがに妻が長男を授かったときは、焦りましたが、結果的にはそこで責任感みたいなものが芽生えて奮起したからこそ合格できたのだと思います」

合格後は法律事務所に勤務したが、ボスと大ゲンカをして3年で飛び出した。独立当初は仕事も少なく、不安も感じたという。高校時代に懸念した通りの展開だが、その後は路頭に迷うどころか、勤務弁護士を雇わなければ間に合わないほど仕事が増えていった。

「御用聞きはできませんが、クライアントが何を望んでいるかを的確に把握することと、目の前の仕事を一生懸命やることだけは心がけていました。当時の弁護士は一方的にアドバイスするタイプの人も多かったので、当たり前のことをきちんとやれば、差別化できるという確信

がありましたし、その通りでした」

## バラエティ番組に 出演することには葛藤もあった

テレビへの出演は、「弁護士会野球部の先輩にだまされて」、TBSの新番組「ウンナン桜吹雪は知っている」の打ち合わせに参加したのがきっかけだ。

「法曹界では、『テレビに出ている弁護士』というのは軽んじられることもあります。とくに『行列のできる法律相談所』はバラエティ番組ですから、深刻な法律案件に携わっている自分が出演することに葛藤もありました」と北村氏。だが、出演すると決めたからには中途半端なことはできないと番組のなかでの法律相談にも真剣

に取り組むうち、好意的にとらえてくれるクライアントが増えた。

「一般の方から、『法律に親しみを持てるようになった』と言われるようになったのは、嬉しいですね」

また、「行列のできる法律相談所」では、同じ法律問題について4人の弁護士の見解が分かれることが多い。法解釈や事実の見方が1つではないということを理解する人が増え、同業者からは「クライアントとのコミュニケーションが取りやすくな

った」とよく言われるという。

「真剣に仕事に取り組んでいるほかの弁護士の姿勢を疑われるようなことはできない」と、番組開始当初は滅多に笑わなかったが、最近は笑顔も見せるようになった。

「真剣に議論をしていれば、多少笑っても大丈夫かなと思ひまして」と話す北村氏。番組への出演も長くなり、これまでの姿が周囲に認められてきたからこそその心境の変化だろう。経営パートナーやスタッフに恵まれ、本業も順調だ。将来の展望を問うと、こう答えてくれた。

「先のことはそう簡単には見えません。ただ、これまでと変わらず、みんながいい仕事をし、精鋭が揃う事務所をつくっていきたい。それが結局はクライアントの信頼につながり、社会への貢献にもなると思っています。振り返れば、紆余曲折はありましたが、『一生懸命やれば、必ずうまくいく』という思いが裏切られたことはありません。僕の人生は相当恵まれていると思います」



## 「一生懸命やれば自然とうまくいく」 野球で身につけた楽観的人生観

大久保幸夫 ワークス研究所 所長

テレビの印象からは気難しく偏屈なイメージもあるが、実際にお会いした北村氏は、楽観的で、さっぱりした性格のスポーツマンという印象だった。

彼の口からは、「一生懸命やれば自然とうまくいく」という人生観が語られた。司法試験の数度にわたる失敗のときも、最初に勤めた事務所でボスと衝突して独立を決意したときも、「一生懸命やれば……」という気持ちが前を向かせたのではないだろうか。

背景には、「自己信頼」がある。自己信頼とは、現在の自己、将来の自己に対して、信頼と希望を持っているという意味である。自己信頼が形成されるためには良好な人間関係や、成功体験の積み上げが必要だが、北村氏の場合、それは中学から高校にかけての野球漬けの生活にあった。

まず、人間関係の積み上げだが、長野県の牧歌的環境のなかで純粋な心を持った野球部やその他の多くの友人たちに恵まれたこと、そして私利私欲なく、強い若者を育てたいという思いで長年ボランティアで野球部の監督をやっていた指導者との出会いがあった。とくに監督からは、「困難に直面したときにこそ勇気を奮い起こせ」という教えを受けたことが印象深いという。

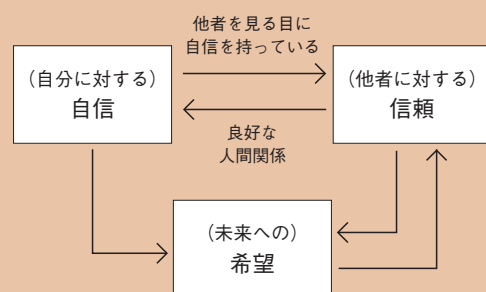
加えて、甲子園出場には至らなかったが、野球に一生懸命に取り組むことで、結果を出せたという成功体験も重要な影響を与えている。練習したことは必ず力になり、試合で出ると

いう確信を得たのだろう。

自己信頼の高い人の特徴には、他者を信頼する力の強さもある。他者を信頼するということは、自分自身の他者を見る目を信頼していることにほかならないので、根底には自己信頼があるのだ。北村氏も、「ごくわずかな会話で、その人を受け入れるべきかどうか素早く判断しますね。その判断に自信があるし、間違ったことはないと思います」と言う。仕事のパートナーでも、プライベートでも、信頼すべき人が否かはすぐにわかり、信頼すべき人と継続的で豊かな関係を築いていくのだという。

若いときの野球漬けの経験から、楽観的人生観や他者を信頼する力を得ていたとしたら、北村氏が野球から得たものは極めて大きかったといえるのではないだろうか。

### 自己信頼の構造



「自信」と「他者への信頼」と「未来への希望」はすべてつながっており、全体として自己信頼を構築している。自信を持っている人だからこそ他者を信頼することができ、その結果として未来への希望が生まれる。